

## いろ扱ひ

### 泉鏡花作

#### 全一章

これは作者の閲歴談と云ふやうなことに聞えます  
と、甚だ恐縮、ほんの子供の内に讀んだ本について  
お話をするのでございますよ。

此頃は皆さんに讀んで戴いて誠に御迷惑をかけま  
すが、私は何うして、皆さんのお書きなすつた物を  
拝見して、迷惑處か、こんな結構なものはないと思  
ふんです。其ですが、江戸時代の文學だの、明治の  
文學だのと云ふ六ヶ敷いことになる、言ひ悪うご  
ざいますから、唯ね、小説、草雙紙、京傳本、洒落  
本と云ふ其積りで申しませう。

母が貴下、東京から持つて参りましたんでい雛の  
箱でさゝせたといふ本箱の中に『白縫物語』だの  
『大和文庫』『時代かゞみ』『大部なるものは其位で  
すが、十册五册八册といろ／＼な草雙紙の小口が揃  
つてあるのです。母はそれを大切にしていして綺麗に持つ  
て居るのを、透を見ちやあ引張り出して 但し讀

むのではない。

三歳四歳では唯だ表紙の美しい繪を土用干のやうに列べて、此の武士は立派だの、此の娘は可愛いなんて お待ちなさい、少し可笑しくなるけれど、悪く取りつこなし。さあ段々繪を見ると其の理解が聴きたくなくて、母が裁縫なんかして居ると、其處へ行つては聞きました、面倒くさがつてナカノ、教へない。夫れを無理につかまへて、ねだつては話してもらひましたが、嘸ぞ煩かつたらうと思つて、今考へると氣の毒です。なるほど脚色だけは口でいつても言はれますが、讀んだおもしろ味は話されません。

又知識のないものに、脚色だけ話をするとなると、こんな煩い事はないのですから、自分もまた其様な物を読むと云ふ智慧はない時分で、始終繪ばかりを見て居たものですから、薄葉を買つて貰つて、口繪だの、挿繪だのを寫し始めたんです。それから鎧武者が大變好になりました。それに親父が金屬の彫刻師だものですから、盃、香爐、最う目貫縁頭などは

ありませんが、其仕事をさせる積りだったので、繪を習へと云ふので少しばかりネ、薄、蘭、竹などの手本を描いて貰ひましたが、何、座敷を取散かしたのが、落で。其中に何なんです。

近所の女だの、年上の従姉妹だのに、母が繪解をするのを何時か聞きかじつて、草雙紙の中にある人物の來歴が分つたものだから、鳥山秋作照忠、大伴の若菜姫なんといふのが殊の外臙屨なんです。所が秋作豊後之助の臙屨なのは分つて居るが、若菜姫が宜くツてならない、甚だ怪しからん、是は惡黨の方だから、と思つて居たんです。

のみならず、一體どう云ふものだから、小説の中にある主人公などは、善人の方よりは惡黨がてきはきして居て可い、善人とさへ謂や、愚圖々々しやあがつて、何うかしたらよさうなもんだ。泣いたり、口説いたり、何のこツたらう。淨瑠璃のさはりとなると頭痛がします。併し、敵役の中でも石川五右衛門は甚だ嫌ですな。熊坂長範の方が好い。

此頃また白縫の後の方を見ると、口繪に若菜姫を描いて、其上へ持つて来て、（皆様御鼻屑の若菜姫）と書いてある。して見ると一般の讀者にも、彼の姐さんは人氣があつたものと見えますね。

母はからだが弱くつて 大層若くつて亡くなりましたが 亡つた時分に、私は十歳だつたと思ひます。其の前から小學校へ行くやうになつて、本當の字を少し許り覺えたりなにかした。それから暫くさう云ふものに遠ざかつて居た、石盤をはふり出して、いきなり針箱の上へ耶須多羅女の泣いて居る處を出されて御覽なさい。悉連太子を慕つて居ると繪解をするものは話さねばならないでせう。さて其の（慕ふ）といふことを子供に説明をして、聞かせるものは、こりやよほど面倒だから、母もなりたけ讀ませないやうにしました。それに親父が八釜敷い、論語とか孟子とか云ふものでなくつては讀ませなかつた。

所が少しイロハが讀めるやうになつて來ると、家にある本が讀みたくなつたでせう。讀んでると目付

かつて恐ろしく叱られたんです。そこで考へて、机の上うへに斯かう掛かつて居ゐる、机掛つくゑかけね、之これを膝ひざの上うへへ被かぶさるやうに、手前てまえを長ながく、向かうを一はい杯ぱいにして置おくので、二階かいに閉籠とぢこもつて人ひとの聲音あしおとがするとヒヨイと其その下したへ隠かくすといふ、うまいものでせう。時々見付みつかつて、本ほんより、私わたしの方が押入おし入れへしまはれました。恚かういふのはいくらもある。

一葉女史えふじよしなんざ草雙紙くさびょうしを讀よんだ時とき、此人このひとは僕ぼくと違ちがつて土藏どざうがあつたさうで、土藏どざうの二階かいに本ほんがあるので、故わざと惡戯いたづらをして、劍突けんつくを食くらつて、叱しかられては土藏どざうへ抛なり込まれるのです。窓まどに金網かなあみが張はつてあるのでせう。其網そのあみの目めをもるあかりで細こまかい假名かなを讀よんだ。其その所爲せゐで、恐おそろしい近視眼ちかめ、これは立女形たておやまの美びを傷きずつて濟すみません。

話はなしが色々いろ／＼になりますが、僕ぼくが活版本くわつばんほんを始はじめて見たみのは結城合戦ゆふきがつせん花鋏形はなはがたといふのと、難波戦記なにはせんき、左様さようです、大阪の戦おほさか たゝかひのことを書いたのです。

厚あつい表紙へうしで赤あかい繪具ゑのぐをつけた活版本くわつばんほんなんです。友とも

達が持つて居たので、其時初めて活版になつた本を見ました。殊にあゝ云ふ百里餘も隔つた田舎ですから、それまでは未だ活版と云ふものを知らなかつたので、さあ讀んで見ると又面白くつて仕様がな

無論前に柔い、「でござんすわいナー」と書いてある草雙紙を見た擧句に、親父がね、其癖大好なん

で、但し硬波の方な

だから、私に内々で借りて來てあつた呉越軍談、あの、伍子胥の傳の所が十册ばかり。其の第一册目でせう。

秦の哀公が會を設けて、霸を圖る處があつて、齊國の夜明珠、魯國の雌雄劍、晉國の水晶簾などゝならぶ中に、子胥先生、我楚國以て寶とするなし、唯善を以て寶とすとタンカを切つて、大氣焰を吐く所がある。それから呉越軍談が鼻屑になる。従つて堅いものが好きになつて來た。それで水滸傳、三國志、關羽の青龍刀、張飛の蛇矛などが嬉しくつて堪らない。

勿論其時分、雑誌は知らず新聞には小説があるも

のか無いものか分らぬ位。處が其中に何んですネ。英語を教はらうと、宣教師のやつて居る學校へ入つたのです。さうするとその學校では郵便報知新聞を取つて居た。それに思軒さんの警使者が毎日々々出て居ます。是はまた飛放れて面白いので、こゝで、新聞で小説を読むことを覚ええました。

また病つきで課業はそつちのけの大怠惰、後で餘所の塾へ入りましたが、又此先生と來た日にや決して、然う云ふものを讀ませない。所が、例の難波戦記を貸して呉れた友人ね、其お友人に智慧を付けて貸本屋へ借りに行くことを覺えたのです。併し塾に居るんですから、ナカノ、きびしくつて外出をさせません。

それを密に脱出しては借りに行くので、はじめは一冊づゝ借りて來たのが、今度讀馴れて來ると讀方が早くなつて、一冊や二冊持つて歸つた所が直に讀んで仕舞ふから、一度に五冊、六冊、一晩にやつつける。其時ザラにア、云ふ新出版物から、昔の本を活版に直したものを無暗に讀んだ。どんな物を讀んだ

か能く覺えて居ませんが、其中に遺恨骨髓に徹して居る本が一冊あります。

矢張難波戦記流の作なんです、借り来て隠して置いたのを見付かつたんで、御取上げとなつて仕舞つた。所で其時分は見料が廉いのだけども、此本に限つて三十錢となつた。南無三寶三十錢、支出する小遣がないから拂ふ譯に往かない。所で、どう間違つたか小學校の先生が - 褒美にくれました記事論説文例、と云ふのを二冊賣つたんです、是が悪事の初めさ。それから四書を賣る。五經を典すね。

月謝が滞る、叔母に泣きつくと云ふ不始末。のみならず、一度ことが露顯に及んでは、益々塾の監督が嚴重になつて讀むことが出来なくなつた。さうなると當人既に身あがりするほどの縁なんだから、居ても起つても逢ひたくツて、堪りますまい。毎日夕刻洋燈を點ける時分、油壺の油を、池の所へあけるんです。あけて油を買ひに、と稱して戸外へ出て貸本屋へ駈付ける。聲音がしては不可んから跣足で出たこともありますよ。所がどうも毎晩油を買ひに

行く譯にいかないぢやありませんか。何か工風をし  
なければならぬのに、口實がなくつては不可ませ  
んから、途中から引返した事などもあつたんです。

それから本を借りて持つて入るときに、見付けら  
れるとわるいから帯の下と背中へ入れるんです、是  
が後でナカノ用にたつたことがある。質屋へ物を  
持つて行くに此の傳で下宿屋を出るので、譯はない  
のです。確に綿入三枚  
怪しからんこつた。

もし何處へ往つたと見咎められると、こゝに不  
思議な話がある、極ないしよなんだけれども、禪を外  
して袂へ忍ばせて置くんで、宜うがすか、何の爲だ  
と云ふと、其塾の傍に一筋の小川が流れて居る、其  
小川へ洗濯に出ましたと斯う答へるんです。

さうすると剣突を喰つて、「どうも禪を洗ひに行  
きますと云ふのは、何だか申上げ悪いから黙つて出  
ました。」と言ひ抜ける積りさ。それから讀む時、  
一番困つたのは彼の美少年録、御存じのとほり千ペー  
ジ以上といふ分厚なんです。

いつたい何時も誤魔化讀をする時には、小説を先づ斯う開いて、其上へ、詰り英語の塾だから、ナシヨナル讀本、スイントンの萬國史などを載せる。片一方へ辭書を開いて置くのです。さうして蹙音がするとピタリと辭書を裏返にして乗掛るしかけなんでせう。

所が薄い本だと宜いが、厚いになると其呼吸が合ひますまい。其處でかたはらへ又澤山課目書を積んだ、此處へ辭書を斜めにして建掛けたものです。さうすると厚いのが隠れませう。最う恚うなるといふ、あつかひ。

夜がふけると、一層身に染みて、惚込んだ本は抱いて寝るといふ騒ぎ、頑固な家扶、嫉妬な旦那に中をせかれていらつしやる貴夫人令嬢方は、すべて此の秘傳であひゞきをなすつたらよからうと思ふ。串戲はよして、私が新しい物に初めて接したやうな考へをしたのは、春廼家さんの妹と背かゞみで、其のころ書生氣質は評判でありましたけれども、それは後に読みました。

最初は今申した妹と背かゞみ、それを貸して呉れた男の曰く、この本は氣を付けて考へて讀まなくてはいけないよと、特にさう言はれたからビク／＼もので讀んで見た。第一番冒頭に書いて、確かお辻と云ふ女、「アラ水澤さん嬉しいこと御一人きり。」よく覺えて居るんです。

お話は別になります、昔の人が今の小説を讀んで、主人公の結局の所がないと云ふ、「武士の浪人ありける。」から「八十までの長壽を保ちしとなん。」と云ふ所まで書いてないから分らないと云ふが、なるほど幼稚な目には、然う云ふ考へがするでせう。妹と背かゞみに於て、何故、お雪がどうなるだらうと、いつまでも心配で／＼堪らなかつたことがありますもの。

東京の新聞は餘り参りませんで、京都の新聞だの、金澤の新聞に、誰が書いたんだか、お家騒動、附たり武者修行の話が出て居るんです。

其中に唯二三枚あつて見たんです、四五十回は續

いたらうと思ひますが、未だに一冊物になつても出  
ず、うる覚えですから間違かも知れませんが、春  
家さんなんです、或ひは朝野新聞かとも思ふし、改  
進新聞かとも思ふんだが、「こゝやかしこ。」と假  
名の題で、それがネ、大分文章の體裁が變つて、あ  
たらしい書方なんです。

中に一人お嬢さんが居るんだネ、其のお嬢さんに、  
イヤな奴が惚れて居て口説くんだネ。(何かヒソ／  
ゝいふ、顔を赧くする、又何かいふ、黙つて傍を向  
く、進んで何かいはうとする、女はフイと立つ。)  
と、先づ恚うです。おもしろいぢやありませんか。

演劇なら兩手をひろげて追まはず。續物の文章な  
らコレおむすとしなだれかゝる、と大抵相場のきま  
つて居た處でせう。また一ひとの友人があつて、貧  
乏長屋の二階を借りて、別に弟子を取つて英語を教  
へて居つた。

壁鄰が機業家なんです、高い山から谷底見れば小  
萬可愛や布晒すなんぞと、工女の古い處を唄つて居

るのを聞きながら、日あたりの可い机の傍で新版を一冊よみました。これが私ども先生の有名な懺悔でございました。あの京人形の女生徒の、「サターン退けッ」「前列進め」なぞは、其の時分、幾度繰返したか分りません。

夏瘦は、辰ノ口といふ温泉の、叔母の家で、従姉の處へわきから包ものが達いた。其上包になつて讀賣新聞が一枚。ちやうど女主人公の小間使が朋輩の女中の皿を壊したのを、身に引受けて庇ふ處で、――伏拝むこそ道理なれーといふのを見ました。

纏つたのは、たしかこちらへ参つてからです。田舎は不自由ぢやありませんか。しかしる懺悔だの、露伴さんの風流佛などは、東京の評判から推して知るべしで、皆が大騒ぎでした。あの然やう。八犬傳は、父や母に聞いて筋丈は、大抵存じて居ましたし、弓張月、旬傳實實記などをよんだ時、馬琴が大變ひいきだつた。

所が、道々ねつつりが厭になつたんです。けれど

も是は批評をするのだと、馬琴大人に甚だ以て相済ぬ、唯ね、どうもネ。彼の人は意地の悪いネチケた爺さんのやうだからさ。作のよしあしは別として好き、きらひ、鼻屑、不鼻屑はかまはないでせう。

西鶴も鼻屑でない、鼻屑なのは京傳と、三馬、種彦なぞです。何遍でも読んで飽きないと云へば、外のものも飽きないけれども、幾ら繰返してもイヤにならなくて、どんなに読んで頭痛のする時でも、快い心持になるのは、膝栗毛です。それから種彦のものが大好だった。種彦と云へば、アノ、「文字手摺昔人形」と云ふ本の中に、女が出陣する所がある。

それがネ、斯う、込み入る敵の兵卒を投げたり倒したりあしらひながら、小手すねあてをつけて、鎧を颯と投げかける。其の鎧の、「搖ぎ絲の紅は細腰に絡ひたる肌着の透くかと媚いたり。」綺麗ぢやありませんか。

おつなものは岡三鳥の作つた、岡釣話、「あれさ恐れだよう、」と藝者の假聲を隅田川の中で沙魚が

いふんです。さうして釣られてね、「ハゼ合點のゆかぬ、「サ飛だのんきでいゝでせう。えゝ、此のころでも草雙紙は樂にして居ります。

それに京傳本なんぞも、父や母のことで懐しい記念が多うございますから、淋しい時は枕許に置きますとね。若菜姫なんざアノ畫の通の姿で蜘蛛の術をつかふのが幻に見えますよ。

演劇を見て居るより餘程いゝ、笑つちやいけません、どうも纏らないお話で、嘸ぞ御聽苦しうございましたらう。

( 談話 )

【完】